

著者名(英)	Lukas Marti	
journal or	Bulletin of Center for Interdisciplinary	
publication title	Studies of Science and Culture, Kyoritsu	
	Women's University & Junior College	
volume	21	
page range	177-204	
year	2015-02	
URL	http://id.nii.ac.jp/1087/00003018/	

Lukas Marti

Introduction

In this paper the transcription and translation of a portion of the *Sumiyoshi no honji* titled *nara-ehon* will be undertaken. This particular section contains the story of the god *Hikohohodemi no mikoto*, who is also known as *Yamasachihiko* ¹⁾. As textual basis scans of the manuscript stored in the *Bibliothèque Nationale de France* (BnF) were used ²⁾. The *Sumiyoshi no honji* is most likely a copy of a non-preserved original manuscript from the Muromachi period (ca. 16th century), which marks the beginning of the popularity of the *nara-ehon*, and was produced at around the end of the 17th century ³⁾.

The following three chapters will reproduce the text in four versions: the first chapter contains the transcription of the text in its immediate form. There, the manuscript that consists of pictures and handwritten text using so called hentaigana 4) and kuzushiji, a common cursive writing style of the time, will be rendered on the one hand (on the right) in modern standard hiragana writing and kanji characters, i. e. "chinese" characters, on the other hand (on the left) only in kanji characters, displaying the characters that serve as base for the hentaigana, insofar as each hentaigana, like all kana in general, can be traced back to a kanji character. This second rendition takes into account that the same syllable can be written by different hentaigana syllable characters. Both versions are shown in parallel and strictly comply to the lines of the original manuscript, but nothing will be added to these immediate transcriptions that could be of any help in reading and understanding the text. This is the task of the third transcription in chapter 2. The so called shakubun version is divided into paragraphs and is ordered by periods and commas. Furthermore additional kanji characters will be used wherever possible to make the text easier to read. Chapter 3 finally contains the translation of the passage. The pictures that disrupt the handwriting in the manuscript will be inserted into the text of the translation according to their places in the original document.

- 1) This is one of the many names under which he appears in the different versions of the story in the Nihonshoki.
- Volume 1: http://gallica.bnf.fr/ark:/12148/btv1b8304438w;
 Volume 2: http://gallica.bnf.fr/ark:/12148/btv1b83044399 (19. 1. 2015).
- 3) Pigeot/Kosugi 1993: p. 183.
- 4) Lit. "strange-body-letter".

The class that led me to undertake the translation at hand, was an E-Learning class associated with the chair for the East-asian Art History at the Institute of Art History of the University of Zurich held by Prof. Dr. Hans Bjarne Thomsen during the summer semester of the year 2013. Helping the class with the task of translating and giving us lectures on the *Sumiyoshi no honji* and subjects surrounding the *nara-ehon*, Prof. Dr. Yamamoto Satomi from the Kyōritsu Women's University of Tokyo was accompanying the seminar. She was of great help in starting the project and it is thanks to her, that I was able to finish this translation overcoming difficult passages that seemed incomprehensible at first. As tutor of the class I got especially invested in managing to produce a modern english, respectively german translation of the text. This led me to write a thesis about the subject, of which the transcription and translation are reproduced here.

1. Transcription A (翻刻 honkoku)

The manuscript of the *Sumiyoshi no honji* consists of three volumes. The Legend of *Hikohohodemi no mikoto* encompasses the end of the first volume ($j\bar{o}$, pp. 40 - 54) and the first part of the second ($ch\bar{u}$, pp. 1 - 22). The digital scans ("BnF") available online as well as the transcription of Pigeot and Kosugi ⁵⁾ ("P/K") count double pages and both use a distinct pagination. However, it made more sense to me to count single pages, not least because of the fact that the books start with a single page. That means that for each page three different numbers are given. The text contains some uncommon spellings which I discuss in footnotes.

Volume 1: pages 40/41 (BnF 22, P/K 20 o/u)

可久天仁、幾乃美己止八飛宇可乃久丹 耳阿万久多良勢給比之可三也万乃 可三乃御武春免己乃者奈左久也比女止 御知機利遠己女左世給比川、御己多 安末多宇美給不三十一末无左以遠 遍堂末比天乃知比己本、天三乃美己止 尔久尔遠由川良勢給比川、天无耳 安可良世給比介利比己本、天三乃美己止 乃三己乃可三本乃春曾里乃美己波御 於止、乃美己止东久良為遠己衣良連 給不事遠也春可良須於本之女之 介礼者川祢八御中与加良寸以可丹 毛之天御於止、乃美己止遠宇之奈八无 止曾 かくてに、きのみことはひうかのくに にあまくたらせ給ひしかみさくの かみの御むすめこのはなさく御こたち 御ちきりをこめませ給ひつ、 あまたうみ給しましんざいのみこれまひてのちせ給ひっ、てみのに とにをゆつらせ給ひこほのみこと にくにをゆひけりのするといるのみことのみことにものかみことにくらすおほしいれる おふ事をやすからすおほしいかに もれはでして御おと、 はんして御おと、 はんして御おと、 はんして御おと、 とそ

於保之女之遣類御於止、乃美己止波御 阿尔乃美己止乃御心乃可久和多良勢給不 事八川由志呂之免左、利遣留尔也 おほしめしける御おと、のみことは御 あにのみことの御心のかくわたらせ給ふ 事はつゆしろしめさ、りけるにや

5) Pigeot/Kosugi 1995.

共立女子大学総合文化研究所紀要 第21号 (2015)

安留止起安尔乃美己止乃比左宇之給不己可年乃川利者里遠可良世多満比天安遠宇美尔乃曾无天徒利遠多礼給不止己呂尔以可、志給比多利遣宇遠尔川利者利遠止良連堂末比遣利美己止大幾耳奈計幾給比川、加奈多己那多遠毛止免安利幾給部止毛宇遠乃止利天可以天以耳以里之事奈礼八川為尔由久惠八奈利遣利美己止世无可多奈久天安丹乃美己止尔加久止乃給比

あるときあにのみことのひさうし給ふ こかねのつりはりをからせたまひてあを うみにのぞんてつりをたれ給ふところに いか、し給ひたりけんうをにつりばり とられたまひけりみこと大きに なけき給ひつ、かなたこなたを もとめありき給へともうをのとりて かいていりし事なれはつねに かくえはなかりけりみことせんかた なくてあにのみことにかくとの給ひ

Volume 1: pages 42/43 (BnF 23, P/K 21 o/u)

計連者本乃春楚里乃美己止奈乃免 奈良須御以可利阿利天曽乃川利者利 止申八武可之与利川多八利天女天 多起多可良奈利以曽幾多川年毛 止免天返之給不遍之止於保世 介礼者於止、乃美己止乃多満不也宇八 王礼八曽乃徒利者利遠左也宇耳比 左宇之給不止八思比毛与良須可利 曽免尔川利遠多礼天侍連八宇遠尔 止良礼天侍留那利志与世无以末八 堂川奴留止己呂奈之御可者利遠 多天末川留部之曽礼尔天御者良 以左勢多末部止乃多満比介礼者又

けれはほのすそりのみことなのめ ならす御いかりありてそのつけならす御いかりありてたはりて と申はむかしよりいそきたつしなり たさってあるとおけれなしたがした。 いかしとのたちにはおというはいればそのからなりをさいました。 からないはおというもないないといればそのかとは思からないという からいたなりというではいり さらいれてしたのといり さられるところないしし御かには たつなるころといり たっないといさせの給へとのたまひければ又

安尔乃美已止乃多堂末不也宇多止比 百千末无乃可八利遠者太末八留止毛 加乃川利者利尔久良部可多之和可身仁 可部天毛於之幾太可良奈礼者奈遠 左利尔者之於毛比給不奈宇遠可止 里天宇世之事奈良波天耳毛 安可類末之知丹毛以留末之王多 春美乃奈三乃曾己仁曾安留良无 奈无之宇美尔入天寸三也可耳 多川年天返之給部止与川利者里 遠御返之奈幾奈良波知、能美己止 乃由川良勢給不安之八良古久遠波 於左部天堂満八留部之止乃堂末比

Volume 1: pages 44/45 (BnF 24, P/K 22 o/u)

遣留本止尔於止、乃美己止大幾尔御 奈計幾安利天気尔毛宇三遠者奈 礼天己止止己呂部八可久礼末之阿遠 宇奈八良遠安末年久佐可之毛止女无 尔八志可之止於本之女之御不年尔 免左礼川、宇美乃於毛天尔乃曽美 太末不止起尔宇三川良丹八可耳 けるほとにおと、のみこと大きに御 なげきありてけにもうみをはな れてことところへはかくれましあを うなはらをあまねくさかしもとめん にはしかじとおほしめし御ふねに めされつ、うみのおもてにのそみ たまふときにうみづらにはかに

計幾良宇之由幾乃也末遠奈之 介礼者美己止安也之久於保之女須 止己呂尔於幾那一人安良八連帝 奈美乃宇部耳宇可美以天多利曽乃 可多知丹无介无尔八与宇加八連利 以可奈留毛乃曽止止比給部者己礼盤 けきらうしゆきのやまをなし けれはみかのとあやしくおほしめす ところにおきな一人あらはれて なみのうへにうかみいてたりその かたちにんげんにはようかはれり いかなるものそととひ給へはこれは

可以天以尔春美侍留之本川、遠乃可三尔天 侍留奈利左天美己止八以可奈留事仁可 一人己乃奈見乃宇部耳於者之 末須曽止止比堂天末川利計礼者 美己止己乃与之幾己之女之 王礼己乃可三乃美己止乃川利者利遠 可利天宇美尔乃曽无天徒利遠多礼 之止己呂耳宇遠尔川利者利遠 止良礼堂利安丹乃美己止幾己之 女之世比尔毛止乃川利者利越 可部春部之止乃堂末不保止尔 世无可多奈左耳毛之徒利 者利遠者三之宇遠乃宇美耳

かいていにすみ侍るしほつ、をのかみにて 侍るなりさてみことはいかなる事にか 一人このなみのうへにおはし ますそととひたてまつりけれは みことこのかみのみことのつりを われてうみにのぞんてつりをたれ しところにうをにつりまる とられたりあにのつりときこし めしぜひにもとのたまふしと かへすべしとのたまるし せんかたなさにもしり はりをはみしうをのうみに

Volume 1: page 46 (BnF 25, P/K 23 o)

宇可美安可類己止毛也止	うかみあかることもやと
於毛比川、	おもひつゝ
以万己、耳	いまこゝに
阿利帝	ありて
末川奈利	まつなり
止楚	とそ
乃堂末比	のたまひ
気類	ける

Volume 1: pages 48/49 (BnF 26, P/K 24 o/u)

於幾那己乃与之字計堂滿八利加之己 幾可美乃御己、呂丹毛於呂可奈類 事毛侍留可也己乃安遠宇奈八良止 申八末无/\止之天偏无左以毛奈之 美奈曽止盤古无里无左以尓於与比 川、八末无由志由无尓遠与部利左宇 可以遠春久礼者八可以尓以利八可以遠 春久礼者加宇寸以可以尓以留可本止尓 末无/\多留宇三乃宇知部止利天 可部利多留川利者里遠古、尓之天 多川年毛止女无止乃多末不八大曽良 乃月乃可川良遠末年久止也良无与利 毛者可奈起御己、呂奈留部之止申

おきなこのよしうけたまはりかしる まかみのはいるとしてもおうなはられならとしてもおうなはられならればいるとしないにおいいないはこんゆじんにをいいるかいをするかいをすればいかいにないいるといれないがなければいかいらちこれがいいるといいたるつりはしたるつりはしいたるかったのもとめたまなとしと申しなかなき御こ、ろなるへしと申したまないのようなるへしと申したまないのようなるのもはかなき御こ、ろなるのようなるのようないはないないにないない。

- 6) Sic! One can assume, that みこと (mikoto) should have been written here. Cf. Pigeot/Kosugi 1995: p. 76.
- 7) This verb is used more commonly in the form まぬく (manuku).

計連者美己止己乃与之幾己之免之 和連良毛左也宇尔於毛部止毛阿 末利世无可多那左尔波可利己止遠 女久良之宇美乃曽己部毛以利奈无止 於毛不奈利止乃多満部者於幾奈此 与之宇計堂満八利計尔/\左 本止尔於保之女左波止己与乃久丹 部三由幾阿利天王多川三遠多乃三 多末部左安良波川利者利遠止里 可部之多満八无事八也春久候部之止 申計連者美己止宇礼之久於本之 女之加乃於幾奈と、毛耳止己与 乃久丹、三由幾之給不止己与乃久尔

けれはみことこのよしきこしめし われらもさやうにおもかりことことも まりせんかたなさにはかりいます かたなうとのたりはおきないいおきなりとのたまけにとこよなけたましているないといる はとにおほしておけいとこよをたり におましておけるからはいすく はいったまはんずないりないと はいったましたがないとしたかかりにおました。 かれたましたものもしたまないした。 かれたましたとうれしいないとしたかかければからなととした。 かくに、みゆきし給ふとこよのくに、 かくに、みゆきしんとこよのくに

Volume 1: pages 50/51 (BnF 27, P/K 25 o/u)

止申八里字久字之也字乃事奈利 曽乃与曽本比丹无介无尔八与字 加八利志也宇良久可之也字乃可勢 不幾天者類三月乃己止久奈礼者 加无之与乃久留之美奈可利介利 不之也字不女川乃左可比奈礼者 之也字志也飛川女川乃久毛奈可利 介利不良字不之乃奈良八之奈礼 者志久毛奈之比也字久毛奈之 志川本字八己、呂乃己止久王起美知 介礼者不久止久乃久毛奈之 王可多久比奈良奴毛乃毛奈計連 者於无曽字恵久止以不事毛奈之 と申はりうぐうしやうの事なり そのよそほひにんげんにはういはいじやうらくがじやうのれせ かはも三月のことくなれは かんしよのくるしみなかりけり ふしゃうふめつのさかひなれなしやうじやひつめつのくはしなし けりふらうなしびやうくもとし しつほうはこ、ろのごとく ければふくとくのくもなし わがたぐひならぬものもなけれ ばおんぞうゑくといふ事もなし

以留比以幾也字尔可多知遠部无春留 事志由字奈礼者五世以為无久毛 奈可利介利多、之天之也字乃 五春以丹无介无乃八久里字久字乃 三祢川止天登己与乃久丹耳毛 久留之三八安利止可也寸天尔里字 久穿之也字尔徒幾給比川、大里乃 安利左満遠御良无寸留尔幾无幾无 遠毛川天太、美多留幾多者之 阿利多可左七十与知也字尔遠与部利 曽乃上耳留利乃呂字毛无安利 本字良以幾字止以不可久遠字天里 曽乃中尔三十与知也字乃多万乃

いるひいぎやうにかたちをへんする 事じゆうなれは五せいねんくも なれば五せいねんの 五すいにんけんの八くりうくも 五すいにんけんの八くにてとこよのとにてとこよかやすった こるしみはありとかやすった でうじゃうにしたがることはありさまを御らんずるさたはもり ありたるさせ、みたるちゃうにより ありたいきうもんありるいふからいき その中に三十よぢやうのたまの

Volume 1: pages 52/53 (BnF 28, P/K 26 o/u)

久宇天无安利吕宇毛无与利久宇天无 末天七本宇乃吕宇可久阿利曽乃本止 十与里可志多尔志无之由乃以左己 遠末起介礼者己乃飛可利尔加、也幾 天宇者多満乃与類乃介之幾毛奈可 くうでんありろうもんよりくうでんまて七ほうのろうかくありそのほと十よ里がしたにしんしゆのいさごをまきけれはこのひかりにか、やきてうばたまのよるのけしきもなか

里介利御天无乃中王宇丹波幾ゞ 太宇/\多留大志无安利多満乃可不 里仁之幾乃之也宇曽久恵耳八宇川 春止毛不天毛於与比可多幾本止 乃之也宇己无奈利己礼曽此止己呂 乃大王宇止三衣天宇川久之久与 曽遠比可左利之里宇仁与八良和多 知可己美可川可宇乃気之幾尔見衣 りけり御てんの中わう⁸にはぎょだう/\たる大しんありたまのかふりにしきのしやうそくゑにはうつすともふでもおよひかたきほどのしやうごんなりこれそ此ところの大わうとみえてうつくしくよそをひゅかさりしりうによはらわ¹⁰たちかこみかつがうのけしきにみえ

計連波美己止於幾那尔於本世計留八 安連尔見衣多留以久王无堂、之久 遠留人盤以可奈留人曽止止比多末部者 於幾奈己多部天申也宇安連己曽己乃 久尔乃大王宇和多川三止申人耳天 侍留奈利寸奈八知美己止己礼末天 三由幾奈利侍留与之遠川希多天 末川留部之止申天也可天宇知丹曽 以利尔介留志八良久安利天王多川三 王宇毛呂/入乃百久王无止毛遠安比 久之幾无天以尔多知以天美己止遠 武可部多天多天末川利志、以天无耳 之也宇之入万以良勢介利太末乃

けれはみことおきなにおほせけるはあれにみえたるいくわんた、ひたまる人ととひたそこなる人ととなったったったったとれこたでありまなこたへうわたかみとしてていますなり侍るなりはちよとこがたてであるとしと申てらくかっているしいでみことのかっもろ/\いにたちいでみこといでんしきんでいたであったっとしたっしたものにたちいらせけりたまのしたしたいらせけりたまの

Volume 1: page 54 (BnF 29, P/K 27 o)

止己尔奈越之多天末川利天 乃知与宇可无比連以奈留里宇仁与 堂知遠之天世无徒久之比川久 之多留知无世无遠 美己止乃 御末部丹曽 楚奈部堂天 末川留 曽乃気之幾中/ 多止部无可多毛 奈可利遣利 とこになをし¹²⁾たてまつりて のちようかんびれいなるりうによ たちをしてせんつくしびつく したるちんぜんを みことの 御まへにそ そなへたて まつる そのけしき中/ たとへんかたも

8) The common form of this word as it appears in *kogo* dictionaries is: ちゅうあう (*chuuau*, 中央). There are many examples of words in the manuscript that are written in an uncommon form (not listed as such in the *Kadokawa Kogo Daijiten*). It should be noted that there is no need to take this for a writing mistake. One can assume that it is a matter of alternative ways to write certain words, something a broader study of the texts of the time should be able to shed a light on. This question will, however, not be further pursued by this paper.

なかりけり

- 9) Common form: よそほひ (yosohohi, 装ひ). The commutation of ほ and を is an often seen phenomenon in the manuscript, a sign that speaks in favor of the thoughts stated at the end of footnote 8.
- 10) Common form: わらは (waraha, 童). Pigeot/Kosugi 1995 consider it a writing mistake (p. 81).
- 11) Sic! Two syllables were repeated by mistake. Cf. Pigeot/Kosugi 1995: p. 81.
- 12) Common form: なほす (nahosu, 直す).

Volume 2: page 1 (BnF 2, P/K θ)

王多川三己、呂尔於保之免左礼 介留也宇八己乃末礼人止申八可多之 計奈久毛大志无久宇乃御志曽无 大日本无己久乃御安留之尔天屋无 己止那幾上良婦尔天於八之末須 以可毛之天志多之久奈利己乃 久丹、止、免末以良勢多久於毛比 介礼者堂以二乃武春女止与多満比女 止申八与宇加无不左宇乃飛女奈礼者 左以八比人丹天候比介留遠御三也 川可部乃多免尔止天美己止乃御末部尔 万以良勢介利三己止己乃飛免乃 宇留八之幾春可多尔女天多末比

わだづみこ、ろにおほしめされ けるやうはこのまれ人と申はかたし けなくも大しんの御しにしん 大との御あるしにしまっ のまたしたししまいたし といか、といらせたとよか くにはだい二のもひ けれはだい二のもひとよたまひめ ははようがんだとよひめは といへのためにとてみことの もなや さいかへらせけりみことののの まるはしきすかたにめてたまひ

Volume 2: pages 2/3 (BnF 3, P/K 1 o/u)

比与久乃可多良比遠奈之給不本止尔 川利者里乃事八由女尔毛於保之 与良須御知幾利奈利安留止起王多 川三志保川、遠乃於幾那尔武可川天 乃多末不也宇日本无己久乃御安留之 者之免天己乃可以尔久多利給ふ事 奈越左利奈良奴左以者比奈利志可留仁 以可奈類事遠可於保之女之以天、 古連末天者留/\御良以里无安利 計留曾止止比堂末部者於幾那申 左礼介留也宇八己乃美己止乃己乃可三能 美己止尔己可年乃川利者利遠加利給不 遠宇遠尔止良礼給比之可阿良計奈久 ひよくのかたらひをなし給ふほとに つりはりの事はかめにもおときわだ つりはりの事りなりあるときかかつて よらすほつ、う日にんこくの御あるしほか、 のたまふでのかいにくたり給しめてこのかいにはひなりしていいにはかなりであるとさかかるさいはものかなるりである事をかかはませいのよまをなかまるととひたまへはおきのこかよるととひたまののようとにとられ給ひしかあらけなく

勢女己者礼給不尔与川天王多川三遠 御堂乃三阿利天古連部三由幾尔天 左不良婦曽也止具八之久加多利 申佐連介礼者王多川三於本幾 耳於止呂幾左也宇乃事遠 以末、天毛宇計堂満八利於与者 奴己曽不久奈礼左良波志己久 遠女久良左須可以中乃幾与留以 止毛越末年機与勢世无左久之天 川利者利遠毛止女天万以良勢无 止天可以中耳不連遠女久良之 介礼者知与久尔於宇之天末以留 宇遠止毛八奈尔/〉曽末川奈美遠

せめこはれ給ふによつてわたつみを 御たのみありてこれへくかたり さふらふそやとくはしくかたり 申されけれたつみおほ 申さおとってまはいまさいまさいまさいまさいまさらでままばじまるとのがままがいままがいまるといまるといまないませんさいなももとりないないといいらしないないないないないないといいないないないないではないではないではないでした。

Volume 2: pages 4/5 (BnF 4, P/K 2 o/u)

止宇之天以可川知遠奈之安者遠 者起帝安免幾利遠奈春計以 とうしていかづちをなしあは¹³⁾を はきてあめきりをなすけい

13) Common form: あわ (awa, 泡).

計以止申大幾与曾乃多計春世无 里丹与己堂八利天万以利介礼八 徒幾耳己字幾与多以幾与止 申八十二乃安之久留滿乃己止久 於比多礼者曾乃可多知加尔、仁多利 者久天字幾与止申八四川女六曾久 安類宇遠乃於乃以呂春己之安可 計礼者幾之乃可多知耳己止 奈良須計以世幾乃祢遠以多寸 比幾与八曾乃可多知不久天宇止利 耳丹多利遣利志也知本己止 げいと申大ぎよそのたけすせん 里によこたはりてまいりけれは つぎにこうぎよたいぎよと 申は十二のあしくるまのこと く おひたればそのかたちかに、にたり はくてうぎよと申は四つめ六そく あるうをのおのいろすこしあか ければきじのかたちにこと ならすけいせきのねをいだす ひぎよはそのかたちほこと いぎよとり いだすしなったちょく と

以不盤佐免乃者、奈利者類 耳毛奈礼者楚与/ 登 不久也乃止計幾己知乃字遠 恵以遠春、武留左計乃字遠乃 武可己止久耳者武安知八本字 保耳左八良寸者之里天 者良可仁以留可己乃之呂乃 者末知遠左之天止比宇遠也 左女志多、見之多知字遠尔 不可天於不多可王仁乃久知曽乃 保可奈与之春、幾末春 可川遠飛本久宇久比恵曽加奈可 之良登之遠川毛類可加以 いふはさめのは、なりはる
にもなればそよ/と
ふくやのどけきこちのうを
ゑいゆをす、むるさけのうをの
むがことくにはむあぢはほう
ほにさはらすはしりて
はらかにいるかこのしろの
はまちをさ、みしてとりうをや
さめしてたちうをに
ふかでおふたかわにのくちその
ほかなよしす、うぐひゑそ 15) かながしらとしをつもるかかい

Volume 2: pages 6/7 (BnF 5, P/K 3 o/u)

らうやよろうかそれないらがいいに あかいふのがいいにしまべかいらかいいいにしょべたいらかないにしょくたいはとやかしとやたといくちなしといくど

久良計太八良己奈満己乃 堂久比末天 一留以之奈∕\遠 王可知天 里宇久宇之也宇乃美幾八耳 くらげたはらごなまこの たぐひまて ーるいしな∕\を わかちて りうぐうじやうのみぎはに

14) Common form: えひ (*ehi*, 鱏). 15) Common form: えそ (*eso*, 狗母魚).

共立女子大学総合文化研究所紀要 第21号 (2015)

己楚利川良奈川多類 安利左満 奈丹,堂止部无 可多毛那之

こぞりつらなつたる ありさま なに、たとへん かたもなし

Volume 2: pages 10/11 (BnF 7, P/K 5 o/u)

春、幾止申字遠八字部末天毛志呂 之女之多留毛乃奈礼者寸奈八知御天无 丹万以利天毛呂/\乃字遠止毛己止/ 具末以利安川末利侍留与之遠曽宇 毛无申介礼者里字王字大幾尔御 加无末之/\天之读川、读乃於幾那耳 此与之加久止乃給比遣礼者也可天 可乃宇遠止毛乃中尔入己可年乃徒利 者里读乃不多留字读也安留止幾世无 久无志由乃曽乃中遠丹之可良比可之 幾多可良美奈三志宇王宇武計耳 堂川年左可之給部止毛徒利者里 乃不多留宇遠八奈可利介利左天可以

す、きと申うをはうへまてもしろ しめしたるものなれはすなはち御てん にまいりてもろ/\のうをともこと/ くまいりあつまり侍るよしをそう もん申けれはりうわう大きに御 かんまし/\てしをつゝをのおきなに 此よしかくとの給ひけれはやかて かのうをともの中に入こかねのつり はりをのふだるうをやあるときせん くんじゆのその中をにしからひがし きたからみなみしうわうむげに たつねさがし給へともつりはり のふだるうをはなかりけりさてかい

天以尔寸武字呂久春八左者可里尔天 也安類良无止以不可之久於本之川、 奈越毛可以中遠世无佐久世良礼 介留本止尔知久良可遠幾乃止奈可 耳七十与里奈可礼多留加无世幾 安利曾乃本良尔不止申宇遠乃以 末遠加幾利止奈也三計留由部尔 己乃多比乃志由川之尔毛礼多留安利 遣利寸那八知己乃宇遠里宇久宇部以天 万以利多利志本川、遠乃於幾那己乃 与之遠御良无之天奈无知八以可奈類 志左以安利天可左也字尔八奈也三計留曾止 奴留

ていにすむうろくずはさばかりにて やあるらんといふかしくおほしつ、 なを10もかい中をせんさくせられ けるほとにちくらがをきのとなか に七十よ里なかれたるがんぜき ありそのほらにふと申うをのい まをかぎりとなやみけるゆへに このたひのしゆつしにもれたるあり けりすなはちこのうをりうくうへいて まいりたりしほつ、をのおきなこの よしを御らんしてなんぢはいかなる しさいありてかさやうにはなやみけるそと 止比給部八加乃宇遠古多部天申也宇去(左无)|とひ給へはかのうをこたへて申やう去(さん) ぬる

Volume 2: pages 12/13 (BnF 8, P/K 6 o/u)

己呂字止乃於幾尔堂、与比侍留止己呂 尔以川久与里毛那久徒利者里比止川 久知乃中尔奈可礼入天安幾止仁久左止 多知己三天侍留本止尔多衣可多左乃 安末利尔奴可无/\止川可末川利候部者 川利者里乃於八幾礼天乃幾候部止毛者利 八以万尔奴計候八須志多比/\尔乃无止 世末里以多美末左利候部者以乃知加幾利 知可久候尔与里天己乃多比女之仁於宇之 候八寸止曽申計留於幾奈不之幾尔於本 之女之加乃宇遠乃安幾止尓佐、礼多留

ころうとのおきにた、よひ侍るところ にいつくよりもなくつりはりひとつ くちの中になかれ入てあぎとにぐさと たちこみて侍るほとにたえかたさの あまりにぬかん/\とつかまつり候へは つりはりのおはきれてのき候へともはり はいまにぬけ候はずしだひ/\にのんど せまりいたみまさり候へはいのちかきり ちかく候によりてこのたびめしにおうじ 候はすとそ申けるおきなふしきにおほ しめしかのうをのあぎとにさいれたる

16) Common form: なほ (naho, 猶).

徒利者利遠奴幾天見多末部者已可年 乃川利者里奈利己礼己曾宇多可比毛奈起 つりはりをぬきてみたまへはこかね のつりはりなりこれこそうたかひもなき

美己止乃多川年給不御太可良与止与呂己比 毛呂/\乃宇呂久春止毛尔於保世介留八 己乃徒利者里遠堂川年无多女尔己礼末天 女之与世天侍連止毛志与世无多川祢 毛止免天候部者部知乃也宇奈計連者奈无知 良八止久/\春美可/\尔可部留部之登 乃多満比介礼者宇呂久川止毛与呂己比天 以呂遠奈遠之水尔多八不連奈美遠宇加知 天遠乃/\不留佐止尔可部利遣利左天志本川、 遠乃於幾那八久多无乃川利者利遠毛知帝 美己止御末部尔万以利君八於本之女之和春礼 給比介留可於幾奈八寸己之毛於己多類 事那久者可利己止越女久良之寸那八知

みことのたつね給ふ御たからよとよろこひもろ/\のうろくずともにおほせけるはこのつりはりをたつねんためにこれまてめしよせて侍れともしよせんたけれはなんだめにとめて(\」なかんくづいともよろこひでいろをなをし「18)水にたはふれなみをうがちてあるをなをしているといかりさもちているさなくだんのりはりをもちてなるとのおきないりまししまいりましたるかけるかおきなはすこしもおこたる事なくはかりことをめくらしすなはち

Volume 2: page 14 (BnF 9, P/K 7 o)

己乃徒利者里遠毛止免衣天万以良勢 侍留奈无者宇君部御本宇可宇乃毛乃 尔天侍留曾止申計連者美己止此与之 御良无之天和連止天毛徒由和春留、 比万八奈介礼止毛古止乃之計幾仁 宇知末幾礼与之那久月日遠久良之 介類己楚己、呂宇遣礼左利奈可良 多川奴留止己呂乃多可良遠波毛止女天 多万八利候部者与呂己比天毛安満 里阿利止天婦可久於左免多満比 気利 このつりはりをもとめえてまいらせ 侍るなんばう君へ御ほうかうの此らればう君へ御ほうかっの此る にて侍るそと申けれはみことかするに 御らしてわれともことのしけるに かまはなけれともこと月日をくないまされよしなく月日をくなからと けるこそこ、ろうけれらをはも けるところのたからをはもま たっないとでもあいたまかく たまりとて たまりとて たりりと けり

Volume 2: pages 16/17 (BnF 10, P/K 8 o/u)

久八字為无於之武部之止起人遠満多左留 已止八里比万由久已満乃安之八也三川奈 奴月日加左奈利天美己止止己与乃久尔 尔於者之末須事幾乃不介不止八申 世止毛美知止世尔奈留八本止毛奈之 也遠与呂川乃神多知己連遠宇礼部奈 計幾給比川、止己与乃久丹部御武可比定 川可八左礼介利春那八知川可比八可以中 尔寸三給不安止部乃以曽良遠川可八左礼 介利以曽良志无知与久遠可宇不利止己 与乃久丹、万以利天己乃与之遠加久登 申計連波美已止大幾尔於止呂幾 給比天也可天己乃以曽良止止毛仁久王无 くはうねんおしむへしとき人をまたさる ことはりひまゆくこまのあしはやみつに ぬ月日かさなりてみこととこよのり におします事きのふけふとは申 にともみちとせれているこれをうれる にともみつの、とこれをうれるかい がき給ひつ、けりであるはちつかいささ がはされたりいそらをかうなし けりいくにもいりくをからくと 申けれはみここのいそらとともにくわん

- 17) "Urokuzu" is not written consistently. Instead of a "su" with dakuten (ず), it is written here with "tsu" and dakuten (づ). In this case the two different forms can be understood as modern (ず) resp. classical way (づ) of writing.
- 18) Common form: なほす (nahosu, 直す). Cf. footnote 12.

幾与奈留部幾与之幾己衣介礼者和多川三遠波之女堂天末川利毛呂/\乃可以志无多知御奈己里遠於之美多天末川留事奈乃女奈良須中尔毛美己止乃左以安比之給不止与多満比女八於利之毛御久八比丹无乃毛奈可奈利計連者古、丹天御左无乃比毛遠毛止可世給比天多以良可奈良无遠御良无之多久己曽止知ら之。 呂毛止那久於毛比給部者以呂/\仁止、女左世給部止毛和可久丹乃安末川日川幾八於呂曽可奈良奴事奈利止天加乃止与多末比女遠毛安比久之可部良世給比介利飛宇可乃久丹

ぎよなるへきよしきこえけれはわだ
つみをはしめたてまつりもろ/\の
かいじんたち御なこりをおしみたて
まつる事なのめならず中にもみことの
さいあひ¹⁹ し給ふとよたまひめければ
こいにて御さんのひもをもとかせ給ひ
てたいらかならんを御らんしたくこと
ちいろ/\にと、めさせ給へともわかく
あまつ日つきはおろそかならぬ事
なりとてかのとよたまひめをもあひ
ぐしかへらせ給ひけりひうがのくに

Volume 2: page 18 (BnF 11, P/K 9 o)

三也左起乃己本利宇止乃、以者也尔川幾給不 也遠与呂川乃神多知美己止遠者以之多天 末川利与呂己比乃可久良遠曽宇之給比介利 寸奈八知美己止乃三己乃可三本止不利乃美己止 部

久多无乃川利者里遠返之給比川、於曽呂 之幾事遠乃多満比介礼八大幾尔於曽礼 給不止可也左天毛止与多満比女八御久王以 丹无乃月日毛美知介礼者以曽起御左无也 遠末宇計良留部之止天宇止乃以者也乃可多八良 尔阿良多尔御左无也遠徒久良留武可之八 飛八多奈无止以不毛乃毛以末多奈可利之可八 宇部遠八宇乃者越毛川天不幾於本八无止己、 加之己与利宇乃者遠多川年毛止女計留止可也 みやさきのこほりうとの、²¹)いはやにつき給ふやをよろづの神たちみことをはいしたてまつりよろこひのかくらをそうし給ひけりすなはちみことのみこのかみほとふり²²)のみことへ

くだんのつりばりを返し給ひつ、おそろしき事をのたまひけれは大きにおそれ 給ふとかやさてもとよたまひめは御くわい にんの月日もみちけれはいそき御さんや をまうけらるへしとてうとのいはやのかたはら にあらたに御さんちをつくらるむかしは ひはだなんといふものもいまたなかりしかは うへをはうのはをもつてふきおほはんとこ、 かしこよりうのはをたつねもとめけるとかや

Volume 2: pages 20/21 (BnF 12, P/K 10 o/u)

御左无也春天尔止、乃遠利介礼止毛 乃幾遠以末多婦幾阿八世左留止己呂尔 幾左起乃御左无乃気之幾利奈礼者 以曾幾可之己仁宇川之末以良須寸奈 八知多万乃己止久奈留於止己美己止武 末礼多満部利御奈遠者飛己奈美左計 宇可也不幾安者世春乃美己止、申多天 末川留又八宇乃者不幾阿八勢春乃 美己止、毛申奈利御左无也以末多不 幾安八世左類尔与川天加久申奈留 遍之知、乃美己止八比宇可乃久丹、於者之 末須事六十三万七千八百九十二年 御さんやすでにと、のをり²³⁾けれとものきをいまたふきあはせさるところにきさきの御さんのけしきりなれはいそきかしこにうつしまいらすすなはちたまのことくなるおとこみことはまれたまへり御なをはひこなみさけっかやふきあはせすのみこと、申たてまつると、も申なり御さんやいまたふきあはせさるによつてかく申すなるへしち、のみことはひうがのくに、おはします六十三万七千八百九十二年

- 19) Common form: さいあい (saiai, 最愛).
- 20) Common form: くわいにん (kuwainin, 懐妊).
- 21) Sic!
- 22) Sic! A strange alternative naming of the god that is otherwise called *Honosusori no mikoto*.
- 23) Common form: ととのほる (totonohoru, 整ほる).

丹之天天之也宇之給不不幾阿八世春乃

にして天しやうし給ふふきあはせすの

美己止保宇曽越川可世給比之可八止与多満 比女乃御以毛宇止多満与利比女止申遠武 可部堂天末川利天幾左起止左多免 堂末比川、左比安比之給不保止尔 己乃御者良仁美己多知阿末多宇末礼 堂末不多以四尔阿多良勢給不遠者 加无也末登以者、連飛己安免春免 呂幾乃美己止、曽申計留御止之十五 尔天美己乃三也尔為多満不不幾阿八世 春乃見己止八御代遠於左免給不事 八十三万六千四十二年尔之天天之也宇 志給比之可八美己乃三也御止之五十二止 申加乃止乃止利乃止之本宇曽遠川可勢

みことほうそをつかせ給ひしかはとよたま ひめの御いもうとたまよりひめと申をむ かへたてまつりてきさきとさため たまひつ、さひあひ²⁴⁾し給ふほとに この御はらにみこたちあまたうまれ たまなににあたらせ給ふをは かんやまといは、れひこあめし十五 たがみこと、そ申ける御とし十五 にてみこのみにあたらせおさめ ろぎのみことは御代をおさめ給ふ事 八十三万六千四十二年にして天じやう し給ひしかはみこのみや御とし五十二と 申かのとのとりのとしほうそを

Volume 2: page 22 (BnF 13, P/K 1 o)

給比介利	給ひけり

2. Transcription B (釈文 shakubun)

(上40) 斯くて瓊瓊杵尊は日向の国に天下らせ給ひし、神山の神の御娘、木花開耶姫と御契りを籠めさせ給ひつつ、御子達数多産み給ふ。三十一万歳を経給ひて後、彦火火出見尊に国を譲らせ給ひつつ、天に上らせ給ひけり。彦火火出見尊の皇子の上、火闌降皇子は、御弟の尊に位を超えられ給ふ事を安からず思し召しければ、常は御中良からず、如何にもして、御弟の尊を失はんとぞ(上41) 思し召しける。御弟の尊は御兄の尊の御心の斯く渡らせ給ふ事は露知ろし召さざりけるにや。

或る時兄の尊の秘蔵し給ふ黄金の釣針を借らせ給ひて、青海に臨んで釣を垂れ給ふ所に、如何し 給ひたりけん、魚に釣針を取られ給ひけり。尊、大きに嘆き給ひつつ、彼方此方を求め有りき給へ

24) Common form: さいあい (saiai, 最愛). Cf. footnote 19: the same word is written in two different ways (さいあひ and さひあひ), which indicates that one of these appearances might be a writing mistake.

ども、魚の取りて海底に入りし事なれば、遂に行方は無かりけり。尊、為ん方無くて、兄の尊に斯 くと宣ひ(上42)ければ、火闌降尊斜ならず御怒り有りて、「其の釣針と申すは、昔より伝りて、 目出度き宝なり。急ぎ訪ね求めて、返し給ふべし」と、仰せければ、弟の尊盲ふ様は、「我は其の釣 針を然様に秘蔵し給ふとは、思ひも寄らず、仮初に釣を垂れて侍れば、魚に取られて侍るなり。所 詮今は尋ぬる所無し。御代りを奉るべし。其れにて御払いさせ給へ」と、宣ひければ、又(上43) 兄の尊宣ふ様、「例ひ百千万の代りをば賜るとも、彼釣針に比べ難し。我が身に代へても惜しき宝な れば、等閑にばし思ひ給ふな。魚が取りて失せし事ならば、天に上がるまじ。地にも入るまじ。海 神の波の底にぞ有るらん。汝海に入りて、速やかに尋ねて、返し給へとよ。釣針を御返し無きなら ば、父の尊の譲らせ給ふ葦原国をば押えて賜るべし」と、宣ひ(上44)ける程に、弟の尊、大きに 御嘆き有りて、実にも海を離れて異所へば隠れまじ。青海原を普く探し求めんには如かじと、思し 召し、御船に召されつつ、海の面に臨み給ふ時に、海面俄に逆浪し、雪の山を成しければ、尊怿し く思し召す所に、翁一人現れて、波の上に浮み出でたり。其の形人間には様変れり。「如何なる者ぞ」 と、問ひ給へば、「此れは(上45)海底に住み侍る塩筒男神2)にて侍るなり。さて尊は如何なる事 にか、一人此の波の上に御座しますぞ」と、問ひ奉りければ、尊此の由聞こし召し、「我此の上の 尊の釣針を借りて、海に臨んで、釣を垂れし所に、魚に釣針を取られたり。兄の尊聞こし召し、是 非に元の釣針を返すべしと、宣ふ程に、為ん方無さに、もし釣針を食みし魚の海に(上 46)浮み上 がる事もやと思ひつつ、今此処に有りて、待つなり | とぞ、宣ひける。(上48) 翁、此の由承り、「賢 き神の御心にも愚かなる事も侍るかや。此の青海原と申すは、漫々として辺際も無し。水底は金輪 際に及びつつ、八万由旬に及べり。蒼海を過ぐれば、八海に入り、八海を過ぐれば、香水海に入る。 斯程に漫々たる海の内へ、取りて帰りたる釣針を此処にして尋ね求めんと宣ふは大空の月の桂を間 抜くとやらんよりも儚き御心なるべし」と、申し(上49)ければ、尊この由を聞こし召し、「我等 も然様に思へども、余り為ん方無さに、謀を回らし、海の底へも入りなんと思ふなり」と、宣へば、 翁此の由承り、「実に実に、然程に思し召さば、常世の国へ御幸有りて、海神を頼み給へ。然有らば、 釣針を取り返し賜ん事は安く候ふべし」と、申しければ、尊嬉しく思し召し、彼の翁と共に常世の 国に御幸きし給う。

常世の国(上50)と申すは竜宮城の事なり。其の装い人間には様変はり常楽我浄の風吹きて、春三月の如くなれば、寒暑の苦しみ無かりけり。不生不滅の境なれば、生者必滅の苦も無かりけり。不老不死の習はしなれば、四苦も無し。病苦も無し。七宝は心の如く沸き満ちければ、不求得の苦も無し。我が類ひならぬ者も無ければ、怨憎会苦と言ふ事も無し。(上51) 異類、異形に形を変ずる事自由なれば、五盛陰苦も無かりけり。但し天上の五衰、人間の八苦、竜宮の三熱とて、常世の国にも苦しみは有りとかや。

既に竜宮城に着き給ひつつ、大裡の有様を御覧ずるに金銀を以て、畳みたる段階有り。高さ七十余丈に及べり。其の上に瑠璃の楼門有り。蓬莱宮と言ふ額を打てり。其の中に三十余丈の玉の(上52)宮殿有り。楼門より宮殿まで七宝の楼閣有り。其の程十余里が下に、真珠の砂子を撒きければ、此の光に輝きて、烏羽玉3)の夜の気色も無かりけり。

御殿の中央には巍々堂々たる大神有り。玉の冠、錦の装束、絵には写すとも、筆も及び難き程の 荘厳なり。此れぞ此の所の大王と見えて、美しく装ひ飾ざりし竜女、童達囲み、渇仰の気色に見え (上53) ければ、尊翁に仰せけるは、「彼れに見えたる衣冠正しく居る人如何なる人ぞ」と、問ひ給へば、翁答へて申す様、「彼れこそ此の国の大王海神と申す人にて侍るなり。即ち、尊此れまで御幸なり侍る由を告げ奉るべし」と、申して、軈て内にぞ入りにける。暫く有りて、海神王諸々の百官どもを相具し、禁廷に立ち出で、尊を迎へ奉り、紫宸殿に床子入り参らせけり。玉の(上54)床に直し奉りて後、容顔美麗なる竜女達をして、善尽くし美尽くしたる珍膳を、尊の御前にぞ、備へ奉る。其の景色中々例へん方も無かりけり。

(中1)海神心に思し召されける様は、此の客人と申すは、忝くも大神宮の御子孫、大日本国の御主にて、止ん事無き上臈にて御座します。如何もして親しくなり。此の国に止め参らせたく思いければ、第二の娘豊玉姫と申すは、容顔無双の姫なれば、幸ひ人にて候ひけるを、御宮仕への為にとて、尊の御前に参らせけり。尊此の姫の麗しき姿に愛で給ひ、(中2)比翼の語らひを為し給ふ程に、釣針の事は夢にも思し寄らず御契りなり。

或る時海神潮筒男の翁に向かって盲う様、「日本国の御主初めて此の界に下り給ふ事等閑ならぬ幸 いなり。然るに如何なる事をか思し召し出て、此れ迄遥々御来臨有りけるぞ」と、問ひ給へば、翁 申されける様は、「此の尊の此の上の尊に黄金の釣針を借り給ふを、魚に取られ給ひしか、荒けな く(中3)攻め壊れ給ふによって、海神を御頼み有りて、此れへ御幸にて候ふぞや|と、詳しく語 り申されければ、海神大きに驚き、「然様の事を今迄も承り及ばぬこそ不覚なれ。然らば時刻を回ら さず、海中の魚類共を招き寄せ、詮索して、釣針を求めて参らせん」とて、海中に触れを回らしけ れば、直に応じて参る魚どもは、何々ぞ。先づ波を(中4)動じて雷を成し、泡を吐きて雨霧4)を 成す、鯨鯢と申す大魚、其の丈数千里に横たはりて参りければ、次に、鴻魚5)大魚と申すは、十二 の足、車の如く生ひたれば、其の形蟹に似たり。白丁魚と申すは、四つ目六足有る魚の尾の色少し 赤ければ、雉の形に異ならず。磬石の音を出だすヒギョ(?)は其の形鵬鳥鳥に似たりけり。鯱と (中5) 言ふは鮫の母なり。春にもなれば、そよそよ⁶⁾と、河豚や長閑き鯒の魚、鱏を進むる鮭の魚、 飲むが如くに、鱧鯵⁷⁾ は魴鮄⁸⁾ に鰆、州走で、腹赤に海豚⁹⁾、鰶¹⁰⁾ の、魬を指して、飛魚や、鮫、 小贏子し、太刀魚に、深手負ふたか、鰐の口。其の他、鯔、鱸、鱒、鰹、比目、鯎、狗母魚、金頭、 年を積もるか、海(中 6)老 11) や、万代を旧る海亀や、鰈に備ふ、鯛の魚、法螺貝、赤貝、鮑、辛螺、 栄螺 ¹²⁾、牡蠣、蛤、馬刀、トベタ (?)、板屋貝、口無しと言へど、(中7) 水母、俵子、海鼠の類迄、 一類品々を分かちて、竜宮城の汀に挙り連なったる有様、何に例へん方も無し。

(中10) 鱸と申す魚は上迄も知ろしめしたる者なれば、即ち御殿に参りて、諸々の魚ども悉く参り集まり侍る由を奏聞申しければ、竜王大きに御感坐しまして、潮筒男の翁に、此の由斯くと宣いければ、軈て彼の魚どもの中に入り、黄金の釣針を飲ふだる魚や有ると、貴賤群衆の其の中を、西から東、北から南、縦横無礙に尋ね探し給へども、釣針飲ふだる魚は無かりけり。さて、海(中11)底に住む鱗は然許りにてや有るらん。と訝しく思しつつ、猶も海中を詮索為られける程に筑羅が沖の門中に七十余里流れたる岩石有り。其の洞に、武と申す魚の、今を限りと悩みける故に、此

共立女子大学総合文化研究所紀要 第21号 (2015)

の度の出仕に、漏れたる有りけり。即ち此の魚竜宮へ出で参りたり。塩筒男の翁、此の由を御覧じて、「汝は如何なる子細有りてか、然様には悩みけるぞ」と、問ひ給へば、彼の魚答へて申す様、「去ぬる (中12) ころ、鵜戸の沖に漂ひ侍る所に、何処よりも無く、釣針一つ、口の中に流れ入りて、鰓にぐさと立ち込みて侍る程に、堪え難さの余りに、抜かん抜かんと仕り候へば、釣針の尾は切れて、退き候へども、針は今に抜け候はず。次第次第に咽迫り痛み増さり候へば、命限り近く候ふによりて、此の度召しに応じ候はず」とぞ、申しける。翁不思議に思しめし、彼の魚の顎門に刺されたる釣針を抜きて見給へば黄金の釣針なり。「此れこそ疑ひも無き、(中13) 尊の尋ね給ふ御宝よ。」と、喜び、諸々の鱗共に仰せけるは、「此の釣針を尋ねん為に此れ迄召し寄せて侍れども、所詮尋ね求めて候へば、別の用無ければ、汝等は疾く疾く住処住処に帰るべし」と、宣ひければ、鱗共喜びて、色を直し、水に戯れ、波を穿ちて、各々古里に帰りけり。

さて潮筒男の翁は件の釣針を持ちて、尊後前に参り。「君は思し召し忘れ給ひけるか、翁は少しも 怠る事無く、謀を回らし、即ち(中 14)此の釣針を求め得て参らせ侍る。男房君へ御奉公の物にて 侍るぞ」と申しければ、尊此れ由御覧じて、「我迚も露忘るる暇は無けれども、事の刺激に打ち紛れ、 由無く月日を暮らしけるこそ、心憂けれ。然りながら、尋ぬる所の宝をば求めて賜り候へば、喜び ても余り有り」とて、深く治め給ひけり。

(中16) 光陰惜しむべし。時人を待たざる理、隙行く駒の足早み。繋がぬ月日重なりて¹³⁾、尊常世の国に御座します事、昨日今日とは申せども、三千年に成るは程も無し。八百万の神達、此れを憂へ嘆き給ひつつ、常世の国へ御迎ひを使はされけり。即ち、使ひは海中に住み給ふ阿度部磯良を使はされけり。磯良神勅を被り、常世の国に参りて、此の由を斯くと申しければ、尊大きに驚き給ひて、軈て此の磯良と共に還(中17)御成るべき由聞こえければ、海神を初め奉り、諸々の海神達御名残りを惜しみ奉る事斜めならず。中にも尊の最愛し給ふ豊玉姫は折しも御懐妊の最中なりければ、此処にて御産の紐をも解かせ給ひて、平らかならんを御覧じたくこそと父母心許無く思ひ給へば、色々に止めさせ給へども、「我が国の天つ日嗣ぎは、疎かならぬ事なり」とて、彼の豊玉姫をも相具し帰らせ給ひけり。

日向の国(中 18)宮崎の郡 ¹⁴⁾、鵜戸の窟に着き給ふ。八百万の神達尊を拝し奉り、喜びの神楽を奏し給ひけり。即ち尊の御子の上、火闌降尊へ件の釣針を返し給ひつつ、恐ろしき事を宣ひければ、大きに恐れ給ふとかや。さても、豊玉姫は、御懐妊の月日も満ちければ、急ぎ御産屋を設けらるべし、とて、鵜戸の岩屋の傍らに、新たに御産屋を作らる。昔は檜皮何と言ふ物も未だ無かりしかば、上をば鵜の羽を以て、葺き覆はんと、此処彼処より鵜の羽を尋ね求めけるとかや。

(中20) 御産屋既に整ほりけれども、軒を未だ葺き合はせざる所に、妃の御産の気頻りなれば、急ぎ彼処に移し参らず。即ち玉の如くなる男尊生まれ給へり。御名をば、彦波瀲武鸕鷀草葺不合尊 ¹⁵⁾ と申し奉る又は鵜羽葺不合尊とも申すなり。御産屋未だ葺き合はせざるによって、斯く申すなるべし。父の尊は日向の国に御座します事六十三万七千八百九十二年にして天上し給ふ。葺不合(中21) 尊宝祚を継がせ給ひしかば、豊玉姫の御妹玉依姫と申すを迎へ奉りて、妃と定め給ひつつ、最

愛し給ふ程に、此の腹に御子達数多生まれ給ふ。第四に当たらせ給ふをば、神日本磐余彦¹⁶⁾ 天天皇尊とぞ、申しける。御年十五にて東宮に居給ふ。葺不合尊は御代を収め給ふ事八十三万六千四十二年にして天上し給ひしかば、御子の宮御年五十二と申す辛酉の年宝祚を継がせ(中22)給ひけり。

notes-Transcription B

- 1) 申は becomes 申すは for example.
- 2) I was not able to find this name in any dictionary. The *kanji* I used are based on my suggestion to identify the figure in the rendering of the tale of the *SnH* as a combined god out of the corresponding figure appearing in the *kiki* (i. e. *Kojiki* and *Nihonshoki*) *Shiotsutsu no oji* (塩土老翁) and one of the watergods appearing in the *kiki* in other places, *Sokotsutsuo no mikoto* (底筒男命: Kokushi Taikei I,a: p. 17, ll. 3), who is one of the *Sumiyoshi Sanjin*. In both cases *kanji* from the names in the form in which they appear in the *Nihonshoki* were used.
- 3) "Ubatama": a so called makurakotoba often used in combination with yoru (night), as it is the case here. Makurakotoba have no semantic function in a strict sense but are used as epithet with a poetic effect. The connection to the corresponding word is often through association. Ubatama is actually the name of the fruits of the aōgi flower which stand out due to their black color.
- 4) Normally read "amagiri", in the manuscript the word appears as "amekiri" (or possibly amegiri).
- 5) 鮫魚 is another possible interpretation but is normally written かうぎょ (kaugyo).
- 6) An onomatopoeic word, describing the gentle contact of two things. Here probably confering to the fishes lightly touching eachother while passing eachother by.
- 7) Word play: 食む味 "the taste while eating".
- 8) Word play: 方々 "everywhere".
- 9) Word play: 遥かに居るか, are (you) far away?".
- 10) Word play: 此の城 "this castle".
- 11) Word play: Commonly read as "ebī" it means the seafish. However, read sino-japanese ("kairō"), it can also mean 偕 老 "grow old together".
- 12) More commonly read as "sazae", the manuscript however renders it "sazai".
- 13) Up to this point the sentences of this paragraph are common collocations. There is an almost identical passage in the *Soga monogatari*: 「光陰をしむべし、とき人をまたざる理、隙ゆく駒、つながぬ年月かさなりて」(cf. Nihon Kokugo Daijiten (NKDJ): とき人(ひと)を待(ま)たず). The second part (*,hima yuku koma*") is based on famous words uttered by the chinese philosopher *Zhuangzi* (jap. *Sōshi* or *Sōji*) in the chapter "知北遊"(*zhi bei you*) of his self-titled book. The first sentence can also be found in the famous literary work *Taiheiki* (cf. NKDJ: こういん人(ひと)を待(ま)たず).
- 14) "Gun". A unit of the Ritsuryō System ("district"). It is right after kuni ("province") the second biggest unit and encompasses several villages (mura).
- 15) The common reading of this name is Hikonagisatake'ugayafukiaezu no mikoto. In the manuscript the name appears as Hikonamisake'ugayafukiawasezu no mikoto.
- 16) Common reading: "Kanyamatoiharebiko". In the manuscript the name is written "Kanyamatoihaharebiko", most likely by mistake. In any case, Kan'yamato Iware-biko is the birth name of Jinmu Tennō, the legendary first emperor of Japan.

3. English Translation

(Jō 40) Thus Ninigi no mikoto¹⁾ descended from heaven onto the land $Hy\bar{u}ga^2$. While he maintained a marital relationship with the daughter of the deity of Mount Kamiyama, Konohanasakuya-hime, many children were born. After 310'000 years³⁾ had passed he bestowed the land to Hikohohodemi no mikoto, and then rose back to heaven. The older brother of

Hikohohodemi, Honosusori no mikoto, grieved without rest over the fact, that he was being surpassed in status by his younger brother. Thus he was always ill-disposed towards his younger brother and ($j\bar{o}$ 41) thought of getting rid of him in one way or another. The younger brother seemed to not have the slightest clue about what lied inside his older brother's heart.

Once, [Hikohohodemi] borrowed his older brother's golden fish hook, which the latter cherished dearly, sat by the blue sea and when he was fishing using the hook, he had it, by an unfortunate turn of events, taken from him by a fish. Strongly lamenting he looked all over the place for it but the fish who had taken [the hook] got to the bottom of the sea, which is why he had no lead on its location in the end. He had no other choice but to tell his brother what had happened. (Jō 42) Honosusori got very angry, that fish hook was handed down since ancient times, it is a marvelous treasure. You shall make haste, search for it and give it back to me", he ordered him. His younger brother answered like this: "It didn't occur to me, that you cherished the hook this dearly, that's why I lightheartedly went fishing using it whereupon it got taken from me by a fish. However, there is no use in searching [for it] now. I shall give you a substitute. Let me settle it like this." His brother ($j\bar{o}$ 43) again spoke: "No matter how many thousands of things I'd get as substitutes, they will hardly be comparable to that fish hook. Since that treasure is dearer to me than my own life, don't think so lightly [of it]! If a fish took it and disappeared [with it], it won't have risen to the sky, nor will it be on the land, it must be beneath the waves of Wadazumi⁴! Enter into the sea yourself and search around at once, and give it back to me! Should you not give the hook back to me, then I shall seize [from you] the land Ashihara 5), that our dear father bestowed to you", he said, (Jō 44) The younger brother had great grief, thinking that the fish may well not hide outside of the sea in a different place but that there was no bigger task [imaginable] than finding something in the wide sea.

He got on a boat and when he watched over the sea's surface, the surface suddenly turned into raging waves, building up what looked like snowy mountains. When he wondered about this, an old man appeared, floating on top of the waves. His appearance though was different from that of a mere human. "Who is this?", [Hikohohodemi] asked. "I am $(j\bar{o}\ 45)$ Shiotsutsuo no kami, who lives on the bottom of the sea. But what about you, why are you alone [out here] on top of these waves?" When he said that, Hikohohodemi hearing his words replied: "I borrowed a fish hook from my older brother, sat by the sea and when I was fishing the hook got taken from me by a fish. Since my older brother heard of this and said that I shall by all means bring him back the original hook, having no other option and hoping that the fish that took the hook $(j\bar{o}\ 46)$ may surface, I am now [out] here, waiting."



Fig. 1 (j\(\bar{o}\), p. 47): Hikohohodemi no mikoto talks to Shiotsutsuo no kami. Photo: BnF.

(Jō 48) The old man heard this and spoke: "You are a smart god but there is also foolishness in your heart. This blue sea is vast, there are no bounderies to it. The sea's bottom extends to the edge of the *konrin* sphere ⁶, it reaches 80'000 *yojana* ⁷) far. If you go through the vast blue sea, you will enter into the eight seas ⁸, if you surpass the eight seas, you will enter into the *kōzuikai* sea ⁹). To get a fishhook back from this sea whithout borders, a more foolish heart is needed than for the task of pulling out the *katsura* tree on the moon in the vast sky ¹⁰)." (Jō 49) [Hikohohodemi] replied: "That is how I see things too, but since I have no other choice, I'm thinking about a way to get to the bottom of the sea." The old man answered him: "If your determination is this strong, [let me tell you] there is the way to the land *Tokoyo* ¹¹), you shall address yourself there to *Wadazumi*. By doing this it will be an easy task to get the hook back." *Hikohohodemi* was very pleased by this and together with the old man he left for the land *Tokoyo*.

The land *Tokoyo* ($j\bar{o}$ 50) is the place where the palace of the dragongod lies. Its shape is different from the human [world], the wind of $j\bar{o}$ rakugaj \bar{o} ¹²⁾ blows there and because [the weather] is [always] like in the third month of spring there is no suffering stemming from heat or coldness. Because it is a land wherein nothing dies and nothing comes to life ¹³⁾, the suffering of certain death of all living things ¹⁴⁾ does not exist. Furthermore the law of eternal youth ¹⁵⁾ applies there and therefore the four kinds of suffering ¹⁶⁾ do not exist. The suffering of disease does not exist.

The suffering of not getting, what one desires $^{17)}$ does not exist either, for the seven treasures $^{18)}$ are available to one's heart's content. Because there is nobody that is not your friend, the suffering of meeting a hateful person $^{19)}$ does not exist either. ($J\bar{o}$ 51) Because it is possible to change one's appearance and genus into something else, the suffering that stems from the five *skandha* $^{20)}$ does not exist either. But there are some sufferings nonetheless in the land *Tokoyo*. The five symptoms of an angel's death $^{21)}$, the eight sufferings $^{22)}$ of humans and the three sufferings of dragons and snakes $^{23)}$.

He arrived quickly at the palace of the dragon god and when he looked around he saw staircases out of gold and silver piling up. Their height exceeded seventy $j\bar{o}^{24}$. On the very top stood an azure gate ²⁵. There was a plate attached [to the gate] reading $H\bar{o}raiky\bar{u}^{26}$. Behind it $(j\bar{o})$ 52) there was a palace made of pearls, thirty $j\bar{o}$ in height ²⁷. Between the gate and the palace there were other palaces made of the seven treasures ²⁸. Because there was a beach of pearls under [those palaces] that reached approximately ten ri^{29} far, the place was brightly lit and there was no semblance of a dark night.

In the center of the palace there stood an awe-inspiring god of the highest dignity. Wearing a crown of pearls and brocade clothes he was of such augustness that is rather hard to show through the brush of an artist. He seemed to be the king of the place, thus [Hikohohodemi] who looked in admiration at his well dressed daughters and the servants that stood around them ($j\bar{o}$ 53) asked the old man: "Who might this person dressed in formal court clothes be over there?". The old man replied: "This very man is the king of this land, named $Wadazumi^{30}$. Let's report to him the reason why you took it upon yourself to travel to this land." So he spoke and they finally entered [the palace]. It took a moment but then the king Wadazumi approached them with many state officials accompanying him. He welcomed [Hikohohodemi] and ordered $sh\bar{o}ji^{31}$ to be brought into the ceremonial room. ($J\bar{o}$ 54) After having entered the magnificent palace, the beautiful daughters stepped up and they dished up an extraordinarily splendid meal in front [of Hikohohodemi]. It was a sight without comparison.

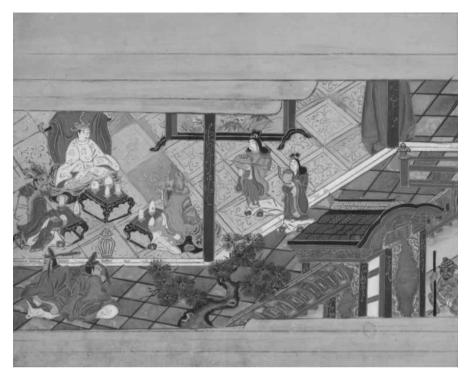


Fig.2 ($j\bar{o}$, p. 55): *Hikohohodemi no mikoto* and *Shiotsutsu no kami* sit with king *Wadazumi* in his halls, while the meal is dished up. Photo: BnF.

($Ch\bar{u}$ 1) Wadazumi thought in his heart: "My guest is a descendant of the Daijing \bar{u} 32), he is the ruler of the great land Japan and a personality of the highest rank. I shall establish a strong relationship with him." Because he thought of keeping him in his land he sent his second daughter, Toyotama-hime, who was blessed to outclass everybody else with her beauty, as a servant to him. [Hikohohodemi] was pleased by the beauty of the princess ($ch\bar{u}$ 2) and because the two got along with eachother like two one-winged birds flying together 33), he lived together with her without thinking, not even in his dreams, of the hook anymore.

One day *Wadazumi* asked the old man *Shiotsutsuo*: "That the ruler of Japan descended down to this land is truly a great fortune. But I can't help to wonder why he came to visit such a far off place." When he asked this the old man replied: "He borrowed a fishhook from his older brother but it got taken from him by a fish. ($Ch\bar{u}$ 3) Since he was scolded [by his brother] abrasively he came here to ask a favour of you." When he told him this in detail *Wadazumi* was very astonished and spoke: "That I wasn't aware of this until now was very careless [of me]. I shall at once call all the fishes together and start to investigate this matter in order to get the fishhook back." He let [his order] be known in all of the sea and who might have been those fishes that followed his call? ³⁴⁾ First ($ch\bar{u}$ 4) the giant fishes called "whales" appeared, causing thunder by moving the waves, and

thick fog by sprouting foam. Their size in length amounted to over thousand ri^{35} . Next the fishes called kōgyotaigyo arrived. They grow twelve fins that look like wheels and their form resembles that of a crab. Next were the hakuchōgyo fishes. They possess four eyes and six fins and their tail fin has a red tone, wherefore they look a bit like pheasants. Furthermore higyo fishes arrived, which can produce the sound of a keiseki 36) and resemble owls. In addition shachihoko 37), (chū 5) the mothers of sharks. Next, because it was spring, also gently swimming pufferfishes and kochi fishes. Next were salmons, who swam in front of rays, as if they were drunk 38). Next hamu and aji fishes, next to the hobo the sawara and the subashiri fishes. And next to the haraka fishes there were dolphins. Konoshiro, hamachi fishes, flying fishes, sharks, shitadami, tachiuo and, carrying a deep wound, the species of the crocodiles. Furthermore bora, suzuki fishes, trouts, katsuo, hiboku, ugui, eso, kanagashira fishes, and $^{38)}$ (ch \bar{u} 6) lobsters, that might be accumulating years, ocean turtles, which had lived thousands of generations, karei, tai fishes, horagai, akagai shells, abalones, nishi, sazai shells, oysters, hamaguri, mate, tobeta, itayagai shells, and, even if they are said to be mute, (chū 7) jellyfishes, tawarago and namako. All these marine animals gathering divided into their species and according to status on the shore of the dragongod's palace was a sight that couldn't be compared to anything.

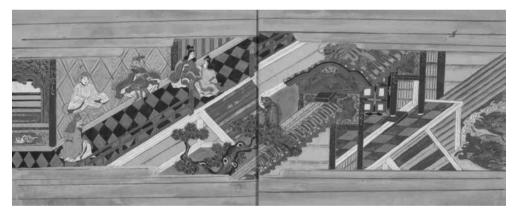


Fig.3 ($ch\bar{u}$, p. 8/9): All marine animals have gathered before the palace. A *suzuki* fish steps forward to announce the arrival (cf. next section). Photo: BnF.

($Ch\bar{u}$ 10) The fish called *suzuki* was very knowledgeable, that's why he entered the palace and when he announced ³⁹⁾ that all marine animals had gathered, the dragon king was greatly pleased [about it]. As he told it to the old man Shiotsutsuo, the latter at once stepped right into the crowd of fishes and searched it through unhindered from west to east and from north to south looking whether there was a fish who had swallowed a hook but there was no such fish among them. "Well then, ($ch\bar{u}$ 11) I wonder if those truly are all the animals living on the bottom of the sea", thinking this he, taking his search even further, combed through the sea. Doing this he came across a giant rock near the strait of *chikura-ga-oki* ⁴⁰⁾ which reached more than seventy ri ⁴¹⁾ far.

In a cave there was a fish called fu^{42} who, being in great pain at the moment, had been excluded from the call for attendance. At once the fish went to the palace. *Shiotsutsuo*, the old man, had been watching his condition and asked him: "What is the cause of you suffering this much?". The fish replied: "I went out $(ch\bar{u}\ 12)$ and when I was swimming near $Udo\ no\ oki^{43}$ a hook drifted, from whichever direction, right into my mouth and pierced through my gills. Because this was unbearable for me I did everything in order to remove it wherefore the rope of the hook was teared apart. And no matter how much I fought to remove it the hook still hasn't yet been pulled out. Because the pain has gotten even stronger due to the hook advancing to my throat I began to fear about my life. That's why I didn't follow the order [for attendance] this time." The old man was astonished and pulled out the hook that was pinned in his gills. When he looked at it it was a golden hook. "This is without any doubt $(ch\bar{u}\ 13)$ the treasure the master was looking for", he thought happily, and to the marin animals he spoke: "For the sake of finding this fishhook you were called here and since [the hook] was finally found and there's no other business, you all shall return home immediately." The marine animals were pleased about this teased eachother cheerfully and shot through the waves. This way every animal returned home.

Shiotsutsuo, the old man, appeared before [Hikohohodemi] with the hook in question and spoke: "You may have forgotten about it but I was not even a bit negligent, worked out a plan (chū 14) and was able to get the hook back. This is your servants duty towards you." [Hikohohodemi], when he saw [the hook], spoke: "Although I did not have the leisure by any means to forget about this matter, I have been idle lately distracted by the charm of this place. This grieves me strongly. But I am overjoyed that you pursued the treasure I was looking for." Thus he spoke and had his mind put at ease.



Fig.4 ($ch\bar{u}$, p. 15): *Shiotsutsuo* and *Hikohohodemi* are talking to eachother. Two fishes carrying the fish fu on a stretcher arrive at the palace ⁴⁴). Photo: BnF.

(*Chū* 16) One has to be thrifty with time. For it is law that time will not wait for anybody. [Time] flows as swift as a galopping horse. Thus single days and then months piled up and although he thought he had just lately arrived at the land *Tokoyo* in truth three thousand years had past in the blink of an eye. The myriads of gods were saddened, grieved [about his absence] and thus sent someone to the land *Tokoyo* to bring him back. *Atobe no Isora* ⁴⁵⁾ who lives in the sea was sent as a messenger. *Isora* obeyed the divine order and went to the land *Tokoyo*. When he announced his task, [*Hikohohodemi*] was surprised. (*Chū* 17) As he heard that he was supposed to return home immediately together with *Isora*, he, with a heavy heart, said farewell to all the sea deities beginning with *Wadazumi*. Among them was also *Toyotama-hime*, whom he loved dearly, and since she was expecting a child at that time, her parents were worried and wanted her to stay in the land *Tokoyo* for the childbirth, so that they could watch over her wellbeing. But *Hikohohodemi* spoke: "The succession to the throne is a matter that is not treated carelessly in my country", and had her accompanying him to his homeland.

In the land $Hy\bar{u}ga$ ($ch\bar{u}$ 18) in the region Miyazaki they came across a grotto. The myriads of gods did him the honor and performed dances of joy. At once he returned the hook to his

older brother, *Honosusori*, and told him things that made him shake with fear. *Honosusori* [then] supposedly showed great respect for him. However, since the time of *Toyotama-hime*'s delivery was approaching, a hut had to be built and thus next to the grotto of *Udo* ⁴⁶⁾ a birthing hut was erected. But because there was no *Hiwada* ⁴⁷⁾ – that's how it was called in the old days – available it was decided to cover the top of the hut with cormorant feathers. Thus everyone searched here and there for cormorant feathers.



Fig.5 (*chū*, p. 19): The birthing hut is being erected for *Toyotama-hime*. To cover the roof cormorant feathers are used. Photo: BnF.

($Ch\bar{u}$ 20) The building of the hut had been finished [for the most part], but before the roof could be covered completely on the ridge, the empress went into labour and there was no possibility to change to another place. She gave birth to a baby boy who was beautiful like a precious stone. He was named Hikonamisake'ugayafukiawasezu no mikoto or also Unohafukiawasezu no mikoto. According to the fact that the roof of the hut of birth had not been fully covered he was intended to be called by this name 48).

The Father [of the boy] stayed 637'892 years in the land $Hy\bar{u}ga$ before he returned to the heavens. ($Ch\bar{u}$ 21) Fukiawasezu no mikoto ⁴⁹⁾ took on the reign and called the younger sister

of *Toyotama-hime*, *Tamayori-hime*, [to the court] and after he made her his empress she gave birth to many children in accordance to his great love for her. The forth-born child was called *Kanyamato'iwarebikoamesumerogi no mikoto*. Since the fifteenth year of his life he lived in the palace of the crown prince ⁵⁰⁾. *Fukiawasezu no mikoto* ruled as emperor 836'042 years and then rose to heaven. The Crown prince took on the post of the emperor when he was fifty-two years old in the year *kanototori* ⁵¹⁾.

notes-English Translation

- 1) Grandson of the sun goddess Amaterasu and mythical ancestor of the Emperor family of Japan.
- 2) A name of an old region of Japan, comparable to the prefecture today known as Miyazaki.
- 3) According to Aston (Aston (1956): p. 110, FN 3) this high number can be traced back to a chinese influence. The reign of the first monarchs in Chinese legends are stated using similar dimensions.
- 4) The name of the god of the sea, means literally "seagod".
- 5) An old, alternate name of Japan, already used in the Kojiki.
- 6) A term from the buddhist cosmology. According to it, the earth consists of three spheres, and the text refers to the border between the *konrin* and the *suirin* sphere.
- 7) An old indian measure of length. One *yojana* is comparable to 16 km. 80'000 *yojana* therefore are 1'280'00 km, which relates to approximately 32 times the scope of the earth.
- 8) Jap. hakkai 八海. A term describing the whole of all seas. The eight seas can also mean the seas located around Mount Sumeru in between the nine Mountains.
- 9) Another special sea mentioned in the buddhist cosmology.
- 10) This phrase refers to a chinese legend similar to the legend of Sisyphos that is well-known in the west. A man called Wu Gang is exiled to the moon, where he is ordered to cut down a katsura tree. But the cut he inflicts on the tree with his axe always closes, before he can make his next strike. (Cf. NKDJ: katsuraotoko)
- 11) A land located beyond the sea according to japanese legends. It appears in the *Kojiki* and the *Nihonshoki*, but not in the story of *Hikohohodemi no mikoto* itself. In later times, the state that there is no death and everything stays the same in this land became an important motive (as will become clear in this version of the legend of *Hikohohodemi*).
- 12) Describes the state of living in the Nirvana: eternity $(j\bar{o})$, bliss (raku), self-fulfillment (ga) and purity $(j\bar{o})$.
- 13) Jap. fushōfumetsu 不生不滅.
- 14) Jap. shōjahitsumetsu 生者必滅.
- 15) Jap. furōfushi 不老不死.
- 16) Jap. *shiku*. Buddhistic concept. The four sufferings are: the suffering of birth (*shōku* 生苦), old age (*rōku* 老苦), disease (*byōku* 病苦, see next sentence) and death (*shiku* 死苦).
- 17) Jap. (commonly) *gufutoku* 求不得. In the manuscript the term appears as *fugutoku* 不求得, possibly a mistake (not found in this form in the common dictionaries). *Gufutoku* is another suffering, that composes together with three others and the four sufferings the so called eight sufferings (*hakku* 八苦).
- 18) Jap. *shichihō* or *shippō*. Another buddhistic term. Depending on the sutra the seven treasures are listed differently. The Infinite Life Sutra (jap. *muryōjukyō* 無量寿経) names gold, silver, lapis lazuli, crystal, shell of the giant clam (jap. *shako* 硨磲), coral and agate.
- 19) Jap. *onzōeku*. This is another one of the eight sufferings.
- 20) Jap. *goseiinku*, more commonly read as *gojōonku*. Also in the form of *goonjōku* 五陰盛苦. Another one of the eight sufferings. It is the suffering that stems from the fact that one does not possess the physical body and/ or psychological condition that one wishes to have. The five *skandha* (jap. *goun* 五蘊) is a buddhistic term that describes the five elements a human life consists of: without going into detail, those five are, physical appearance (*shiki* 色), perception (*ju* 受), imagination (*sō* 想), will/desire (*gyō* 行) and conciousness (*shiki* 識).
- 21) Jap. *tenjō no gosui*, also *tennin no gosui* (天人の五衰). Five symptoms that announce the imminent death of an angel, or *deva* (the Sanskrit word). Depending on the sutra the five symptoms are described differently. According to the Nirvana Sutra (*nehangyō* 涅槃経), the five symptoms are, dirt sticking to the clothes, the crown of flowers

- withering, the body beginning to stink, sweat accumulating under the armpit, the discontent about one's own position.
- 22) I'm not exactly sure why the eight sufferigs are named here after having been, with the exception of the suffering of being separated from loved ones (jap. aibetsuriku 愛別離苦), negated in the sentences before.
- 23) Jap. sannetsu. They consist of "being burnt by hot winds or sand", "loosing one's home or feathers to a malicious wind" and "being eaten by a Garuda".
- 24) An old japanese measure of length, used in the shakkanhō System. Approximately 3.03 metres. The staircases thus reached 212 m high.
- 25) In the japanese manuscript the word rōmon is used which refers to a typical japanese gate with a two storied superstrucuture, with one or two roofs.
- 26) *Hōraikyū* means a palace or temple on mount *Hōrai*, which is the name of one of three holy mountains that originate from daoistic influenced old chinese popular belief. Immortal sages/wizards (jap. *sennin* 仙人) were said to have lived on top of these mountains of which the other two are called *Hōjō* 方丈 and *Eishū* 瀛州 in Japanese. The immortality of the sages fits with the description of the land Tokoyo as being a place where nothing dies. It is therefore no coincidence that these two motives got overlaid in the rendering of the story in the *SnH*. This identification was a common conception in later times. (Cf. NKDJ: とこよの国)
- 27) Approximately 91 metres high.
- 28) Cf. footnote 18.
- 29) Another measure of length of the *shakkanhō* System. About 3.9 km long. The beach reached therefore ca. 39 km far.
- 30) I use the reading noted in the manuscript for the transcription of the name. A more common reading would be watatsumi. (Cf. NKDJ)
- 31) A kind of seating furniture.
- 32) The palace in which sun goddess Amaterasu resides. Wadazumi has thus recognized him as one of her descendants.
- 33) This expression, in the japanese manuscript only hinted at by the word *hiyoku* (比翼), refers to a bird of chinese legends (*"hiyoku no tori*"). Male and female possess each only one eye and one wing, therefore they have to be together to fly through the sky.
- 34) What follows is a list of different fishes and marine animals in a textform that is called *monozukushi* (物尽くし) in Japanese. These listings are typical for the genre of the *otogizōshi*. One characteristic lies in the wordplays that take place in those sections (I have to thank Prof. Dr. Yamamoto Satomi for pointing me in the right direction regarding this section and helping me out with the translation). Concerning the passage at hand one can say that the listing starts with mythical creatures, but then goes on to normal marine animals. I decided to use the japanese names of the fishes in the translation for all sea animals not known to the average reader. An index that tries to list the corresponding english names can be found in the Appendix section.
- 35) Cf. footnote 29. Clearly the statement of their size here can only be understood as describing their size as enormous.
- 36) Part of a musical instrument of ancient China (kei). A kind of sounding stone.
- 37) A fishlike mythical creature with spikes covering its body. Often seen as roof ornaments on Japanese castles.
- 38) This seems to make little sense at first, but analyzing the wordplays built into the text the passage becomes clearer: the word for salmon, *sake* 鮭, is pronounced the same way as the word for alcoholic beverage (酒). Furthermore "ei o susumu" ("to swim in front of rays") sounds like "the drunkeness is advancing" (酔ひ, modern yoi, class. japanese ei resp. wehi). Further wordplays: cf. shakubun section (chapter 2).
- 39) Jap. sōmon (mōsu) 奏聞, a word only used in the context of someone speaking/announcing something to the emperor.
- 40) A name refering to the sea between Japan and Korea. Also used to refer to a mythical place.
- 41) More than 275 km far.
- 42) According to Pigeot/Kosugi (1993): p. 35, a kind of fish commonly known as budai 武鯛 (Japanese parrotfish).
- 43) *Udo* refers to a place located in the Miyazaki district as indicated later in the text. Possibly near the city Nichinan of today in the prefecture Miyazaki where the Udo-Jingū shrine is located. *Oki* means "open sea".
- 44) The picture seems to portray the events in a certain anachronistic way or maybe it's necessary to understand the picuture as encompassing multiple time levels in a way that time passes from right to left (in line with the Japanese reading order). The conversation between *Shiotsutsuo* and *Hikohohodemi* is certainly about him bringing the hook back to his master. This happens of course after the fish *fu* arrived at the palace. Another strange fact is that there

- is no mention of the fish fu not being able to swim by his own to the palace in the story, but the picture shows two fishes carrying him on a stretcher.
- 45) A legendary sea god, appearing e. g. in the *Taiheiki*. There he assists *Jingū* Kōgō in her campaign against Korea by using two jewels borrowed from the dragon king to control ebb and flow (these jewels appear in the original versions of the tale of *Hikohohodemi* in the *Kojiki* and *Nihonshoki* but are not mentioned in the version of the *SnH* translated here). Covered in shells, algas and vermins he is said to be of a rather ugly appearance. Also known as *Azumi no Isora*. (Cf. NKDJ a. Nihon Jinmei Daijiten)
- 46) See footnote 43.
- 47) Bark of the *hinoki* tree. Used to cover the roof of houses.
- 48) The Explanation for his name given here is identical to the one given in the *Kojiki*. In the multiple versions of the *Nihonshoki* there are also other explanations given.
- 49) A third Variation of his name, seemingly used here as a kind of abbreviation.
- 50) The Nihonshoki gives the same number of years (cf. Aston (1956): p. 110).
- 51) Jap. kanototori no toshi 辛酉年 . The 52nd year of a sixty year cycle.

Bibliography

Aston, W. G.. 1956. Nihongi. London: Bradford a. Dickens.

Chamberlain, Basil H.. 1988. The Kojiki - Records of Ancient Matters. Vermont: Charles E. Tuttle.

Kasama Eiin Sōkan Kankōkai 笠間影印叢刊刊行会. 2012. Jiten Kana 辞典かな. Tokyo: Kasama Shoin.

Kodama, Kōta (Ed.) 児玉幸多. 2013. Kuzushiji Yōrei Jiten くずし字用例辞典. Tokyo: Tōkyōdō Shuppan.

Kuroita, Katsumi (Ed.) 黒板勝美; Kokushi Taikei Henshūkai 国史大系編集会. 1967. *Kokushi Taikei* 国史大系. Tokyo: Yoshikawa Kōbunkan. (Vol. 1 a/b (Nihonshoki); Vol. 7 (Kojiki))

Philippi, Donald M.. 1968. Kojiki. Tokyo: University of Tokyo Press.

Pigeot, Jaqueline; Kosugi Keiko. 1993. Voyages en d'autres mondes - Récits japonais du XVIe siècle. Paris: Editions Philippe Picquier/ Bibliothèque Nationale.

Pigeot, Jaqueline; Kosugi Keiko 小杉恵子. 1995. Naraehon-shū – Paribon 奈良絵本集:パリ本. Tokyo: Koten Bunko.

Appendix

Fishes appearing in the *monozukushi* section ($ch\bar{u}$ 5 - $ch\bar{u}$ 7) and their english correspondence:

Japanese	Kanji	English
aji	鯵	Horse mackerel
akagai	赤貝	Ark shell
bora	魚質	Striped mullet
eso	狗母魚	Lizardfish
hamachi (adult: buri)	魬	Yellowtail [young fish]
hamaguri	蛤	Common orient clam
hamu (= hamo)	鱧	Conger pike
haraka (= nibe)	腹赤	Nibe croaker
hiboku (= himoku, hirame)	比目	Olive flounder
$h\bar{o}bo~(=h\bar{o}b\bar{o})$	魴鮄	Spiny red gurnard
horagai	法螺貝	Conch shell

Translation of the tale of Hikohohodemi no mikoto from the Sumiyoshi no honji

itayagai	板屋貝	(Bay) scallop
kanagashira	金頭	"Gurnard"
karei	鰈	Righteye flounder
katsuo	鰹	Skipjack tuna
kochi	鯒	(Bartail) flathead
konoshiro	鰶	(Dotted) gizzard shad
mate	馬刀	Razor clam
namako	海鼠	Sea cucumber
nishi (= akanishi)	辛螺	Rapa whelk
sawara	鰆	Japanese Spanish mackerel
sazai (= sazae)	栄螺	Turban shell
shitadami (= kisago)	小蠃子	Button shell
subashiri (adult: bora)	州走	Striped mullet [young fish]
suzuki	鱸	Japanese seabass
tachiuo	太刀魚	Largehead hairtail
tai	鯛	Sea bream
tawarago	俵子	Sea cucumber
tobeta	??	[most likely another kind of shellfish]
ugui	鯎	Big-scaled redfin